第一章　六条御息所の物語　御禊見物の車争いの物語

［第一段　朱雀帝即位後の光る源氏］

　世の中かはりて後（父帝が退位なさり東宮が即位為されてからは）、よろづもの憂く思され（源氏は何につけても勝手が違って）、御身のやむごとなさも添ふにや（御自身の身分に責任有る立場を意識せざるを得なくなって）、軽々しき御忍び歩きも（気軽な夜遊びも）慎ましうて（つつましうて、控え為されて）、ここもかしこも（あちこちの女の家は何処も）、おぼつかなさの（源氏の御訪問の無い事を）嘆きを重ねたまふ（嘆き重ねていらっしゃる。）、報いにや（その反動に、源氏は源氏で）、なほ我につれなき人の御心を（一切応じる素振りの無い藤壺宮を）、尽きせずのみ思し嘆く（思い続けて嘆き為さる）。

　今は、ましてひまなう（以前にも増していつも）、ただ人（ただうど、普通の夫婦）のやうにて（のように中宮は退位された院と）添ひおはしますを（一緒に暮らしていなさるのを）、今后は（母后になられた弘徽殿大后は）心やましう思すにや（不愉快にお思いなのか）、内裏にのみさぶらひたまへば（院で暮らさずに御所にのみ御出ででしたので）、立ち並ぶ人なう心やすげなり（中宮は大后と張り合わずに済んだので気ままにお過ごしでした）。

　折ふしに従ひては（院は季節ごとに）、御遊びなどを好ましう（管絃の宴を熱心に）、世の響くばかりせさせたまひつつ（評判になるほど盛大に催されて）、今の御ありさま（今の暮らしぶり）しもめでたし（でも華やかでした）。

　ただ（ただ院は頻りに）、*春宮をぞ（今の皇太子の事を）いと恋しう思ひきこえたまふ（とても心配して御出でのようでした）。御後見のなきを（藤壺側に有力な後ろ盾が無いのが）、うしろめたう思ひきこえて（気掛かりな御様子で）、大将の君に（だいしゃうのきみに、近衛大将に昇進した源氏の君に）よろづ聞こえつけたまふも（良く面倒を見るようにとお申し付けなさったので）、かたはらいたきものから（源氏は心苦しい反面）、うれしと思す（嬉しくお思いだった）。　*此処で言う「春宮」とは注釈に≪桐壷院の第十皇子、実は源氏と藤壷の御子。≫とある。実に、この為に藤壺を中宮に立后して置いた、という事なのだろう。第一皇子に譲位するから、第十皇子を立太してくれ、という抱合せ販売のような遣り方。後見の無い第十皇子を思う親心から出た苦肉の策かもしれないが、院が退位後もキングメーカーとして影響力を残した点では、後の院政に通じる手法にも見える。

　まことや（ところで）、かの*六条御息所（ろくでうのみやすんどころ）の御腹の*前坊（ぜんばう）の姫君、*斎宮にゐたまひにしかば（斎宮に選ばれて居なされたので）、　*「六条御息所」については≪「夕顔」巻に「六条わたりの御忍びありきのころ」、「若紫」巻に「おはする所は六条京極わたりにて」、「末摘花」巻に「六条わたりにだに離れまさり給ふめれば」とあった人。「御息所」という呼称から、天皇や皇太子の妃で、皇子や皇女を生んだ方という意が籠められる。≫と注釈にある。院の在位中は其の身分を明示する事さえ憚るほどの高貴な御方であり、当時の人たちには口籠もる事で、却って其の身分の高さが偲ばれた、のかもしれない。ただ私には、やっと明示されたか、と以前の不明瞭で未消化な不快感が少し解消された。序でに年齢を整理すると、後の記述からの逆算らしいが、今現在で六条御息所は 29 歳との事。源氏は今年で 22 歳。また、斎宮である御息所

の娘はこの時 13 歳で前坊妃が 16 歳の時の子だったようだ。「花宴」巻から 2 年経過していて、其の事は此処に記された「姫君、斎宮にゐたまひ」から推算されるという。注釈に≪斎宮は伊勢へ下向するまでに三年の潔斎が必要なので、「花宴」巻から「葵」巻の間に、二年の空白が存在する。≫とある。また、「夕顔」巻で源氏はやっと「六条わたり」と朝寝坊するほどマッタリ出来たようだが、当時は 5 年前だから源氏が 17 歳で六条の女は 24 歳だった。8 歳の娘を抱えた未亡人が、前途有望な見目麗しい源氏の情熱に絆されたとしても無理は無い。いや寧ろ、垂らし込んだとしても御手柄である。　*「前坊」については、≪前皇太子。桐壷院の弟。立坊後、まもなく亡くなった。≫と注釈にある。「六条御息所」はこの「前坊」の妃で「斎宮にゐたま」ふ姫宮を生んだ方、だった訳だ。血縁は無いが縁戚では源氏の叔母に当たる人で、そう思えば単に位の高さばかりからではなしに、語り手が口を濁らしたのも分かる様な気も少しはする。　*「斎宮」は≪天皇の即位ごとに選ばれて伊勢神宮に奉仕した未婚の内親王または女王。祟神(すじん)天皇の代に始まるとされ、後醍醐天皇の代まで続いた。いつきのみや。いつきのみこ。(Yahoo 辞書)≫とある。なお「斎院」は≪京都の賀茂神社に奉仕した未婚の内親王または女王。(同)≫とある。

大将の(だいしゃうの、源氏の君の)御心ばへも(自分への御心遣いも)いと頼もしげなきを(とても頼り無さそうなので)、「幼き御ありさまの(幼い娘の)うしろめたさにことつけて(世話を見る為と言う理由立てで)下りやしなまし(自分も伊勢に下ってしまおうか)」と、かねてより思しけり(六条御息所は予てから御思いに為っていらっしゃいました)。

院にも(院に於かれても)、かかることなむと(この六条の意向は)、聞こし召して(お耳になされて、源氏を次のように窘めなされた)、

「故宮の(我が亡き弟宮の)いとやむごとなく思し(とても大事に思い)、時めかしたまひしものを(引き立てて居らした妃を)、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるが(他の身分の軽いものと同じように遇するのが)、いとほしきこと(先ず心得違いだ)。

斎宮をも(斎宮と成った姫宮も)、この御子たちの列(つら)になむ思へば(我が子同然とも思うので)、いづかたにつけても(その意味からもくれぐれも)、おろかならざらむこそよからめ(粗略になど扱わぬが良かろうぞ)。

心のすさびにまかせて(気の向くままに)、かく好きわざするは(色事の相手で済まそうなどとは)、いと世のもどき負ひぬべきことなり(ひどい世間の非難を負い兼ねないというべきだ)」など、御けしき悪しければ(院の御機嫌が悪いので)、わが御心地にも(源氏自身も)、げにと思ひ知らるれば(尤もな事と思い知って)、かしこまりてさぶらひたまふ(恐縮してお聞きに為る)。

「人のため(相手の立場を)、恥ぢがましきことなく(辱める事無く)、いづれをもなだらかにもてなして(どの女にも万遍なく接して)、女の怨みな負ひそ(恨みを買わぬようにせよ)」とのたまはするにも(との院の仰せに)、

「*けしからぬ心のおほけなさを(藤壷との不倫を)聞こし召しつけたらむ時(院がお知りに為ったら)」と(と思うと)、恐ろしければ(源氏は恐ろしくなって)、かしこまりてまかでたまひぬ(身の縮む思いで退出なされた)。　*「けしからぬ」の「ぬ」は打ち消しの助動詞「ず」の連体形。「けしかる」は＜不届きな＞。「けしからぬ心のおほけなさ」は＜不埒な恋情の畏れ多さ＝藤壷との不倫＞。

また(しかしながら)、かく院にも聞こし召し(このように院もお知りに為り)、のたまはするに(意見もされて)、人の御名も(六条の名誉の上でも)、わがためも(源氏自身の立場上も)、*好きがましういとほしきに(色事一辺倒では具合が悪い仲なので)、いとどやむごとなく(ますます敬わないと)、心苦しき筋には(相済まない相手とは)思ひきこえたまへど(思い申し上げ為さるが)、まだ表はれては(いまだに表立って)、*わざともてなしきこえたまはず(正式の妻として六条御息所を持て成しなさる事は為さいませんでした)。 *「好きがましういとほしき」は<いかにも好色めいて懸念される(御仲)>の「仲」が省略されている、のだろう。 *「わざと」は≪『集成』は「表立っては、正妻としてのお扱いをしてお上げにならない」の意に解し、『完訳』は「公然と正式な結婚の形に」と注す。≫と「注」にある。

女も(御息所の方も)、似げなき御年のほどを(年上である事を)恥づかしう思して(気後れに御思いで)、心とけたまはぬけしきなれば(親しげに為さらない態度だったが)、それにつつみたるさまにもてなして(源氏は其れを口実にして妻として迎えるのを遠慮していると)、院に聞こし召し入れ(院には言い訳を申し入れたという事情が)、世の中の人も知らぬなくなりにたるを(世に知らぬ人も無いほどになってしまったので)、深うしもあらぬ御心のほどを(その冷淡な源氏の為さり様を)、いみじう思し嘆きけり(女はひどく嘆いて御出ででした)。

かかることを聞きたまふにも(こうした源氏の悪評を同じ宮筋でお聞きになった)、*朝顔の姫君は、「いかで(決して)、人に似じ(同じ目には会いたくない)」と深う思せば(と深く思いに為って)、はかなきさまなりし(少しばかしはお書きに為っていた)御返りなども(源氏からのお手紙のお返事なども)、をさをさなし(さっぱり御出しに為らない)。 *「朝顔の姫君」は≪「帚木」巻に登場。源氏が朝顔に和歌を結んで贈った女性。桃園(ももぞの)式部卿宮(しきぶきゃうのみや)の姫君。≫と「注」にある。

さりとて、人憎く(悪口や)、はしたなくはもてなしたまはぬ(嫌味は言い為さらない)御けしきを(姫の態度を)、君も、「*なほことなり(さすがに奥ゆかしい)」と思しわたる(と思い込んで居らした)。 *注釈に「源氏の感想。『集成』は「やはり人とは違っている」の意に、『完訳』は「なびかぬ姫君にかえって執心」と注す。」とある。文の運びからすれば、御返りが減ったのを、却って軽々しくないと執心した、のだろうと『完訳』に従う。

大殿には(おほひどのには、左大臣家の姫なる正妻は)、かくのみ(このようなことばかりで)定めなき御心を(結局は家に寄り付かない源氏の気持ちを)、心づきなしと思せど(不満に御思いだったが)、あまりつつまぬ御けしきの(そうした忍び歩きを別に隠そうともしない源氏の態度に)、いふかひなければにやあらむ(言っても直らないとでも思ってか)、深うも怨じきこえたまはず(深くは恨んでも居なさそうで御座いました)。

*心苦しきさまの御心地に(ただ、姫は悪阻の苦しさから)悩みたまひて(懐妊を御知りに為って)、もの心細げに思いたり(源氏の遊び歩きを寂しく思っていらっしゃいました)。 *「心苦しき様」については≪懐妊による悪阻の苦しみをさす。≫と注にある。こういう重要な事を明示しないのでは言い換えをする意味は相当に削がれると思うが、訳文はいわゆる逐語訳で意図が良く分からない。

めづらしくあはれと思ひきこえたまふ(源氏は姫の御懐妊を愛でて姫を労しく御思いのようでした)。誰れも誰れもうれしきものから(左大臣家は喜びに湧く一方で)、ゆゆしう思して(安産を

祈願して)、さまざまの御つつしみ(様々な加持祈祷を)せさせたてまつりたまふ(御依頼為されて居らした)。

かやうなるほどに(というわけで源氏は)、いとど御心のいとまなくて(とても遊び歩く御気持ちには成れず)、思しおこたるとはなけれど(忘れはしなかったが)、とだえ多かるべし(女たちへの訪問は途絶えがちでした)。

[第二段　新斎院御禊の見物]

そのころ(上皇院が今上帝に譲位された二年前の其の際に)、斎院も下り居給ひて(おりゐたまひて、交代為されて)、后腹の(皇太后の御産みになった)女三宮ゐたまひぬ(第三内親王が新斎院に選ばれました)。*帝(みかど、院)、后(きさき、皇太后)と(共に)、ことに思ひきこえたまへる宮なれば(殊に大事に可愛がられた姫なので)、筋ことに(俗世を離れて神に奉仕する身に)なりたまふを(御成りなのを)、いと苦しう思したれど(とても労しく御思いに成ったが)、こと宮たちのさるべきおはせず(他の姫宮たちに適任者が居らっしゃいませんでした)。　*「帝后」について≪桐壷院と弘徽殿大后をさす。上皇をも「帝」と呼称する。≫と注釈に有る。特に、二年前の譲位直後の「そのころ」の事だったので、敢えて「帝」と言ったのかもしれない。尤も、今上帝から見ても、実の妹ではある。

*儀式など(二年前の新斎院の就任式は)、常の神わざ(つねのかむわざ、型通りの神事)なれど(だったが)、いかめしうののしる(右大臣の肝いりで盛大に執り行われた)。　*此処で言う「儀式」とは「禊祓(みそぎはらえ)」の事らしい。「禊祓」は≪『延喜式(えんぎしき)』によると、天皇即位ののち未婚の内親王のうちより卜定(ぼくじょう)し、3年間の潔斎生活に入る儀式≫とされ、「卜定」は≪宮城内の便宜のところ(雅楽寮や宮内省など)を、卜(うらない)により初斎院(しょさいいん)と定め(Yahoo百科)≫る事とされる。つまりは、帝の妹宮が帝の名代として神職を勤める資格を得る為に御所の一角に籠もって謹慎生活を送る、という名目で御所入りをする入所式だったのだろう。『延喜式』は≪弘仁式・貞観式以降の律令の施行細則を取捨・集大成したもの。50巻。三代式の一。延喜5年（905）醍醐天皇の勅により藤原時平・忠平らが編集。延長5年（927）成立。康保4年（967）施行。(Yahoo辞書)≫とある。

*祭のほど(其の後日の賀茂祭における斎院の御勤めは)、限りある公事に(決まり事を)添ふこと多く(大袈裟に演出して)、見所こよなし(見応えが有りました)。人がらと見えたり(姫のお人柄でしょうか)。　*祭は、「賀茂祭。四月中の酉の日に行われる」、との事。この祭で上賀茂・下鴨の両社で祷りを捧げる事が斎院の勤めだったので、祭りに先立って「禊祓」は執り行われた。ただし、此処での記述は二年前の賀茂祭の事を言っているのだろう。

*御禊の日(ごけいのひ、そして今年の儀式は)、*上達部など(役員は)、数定まりて仕うまつりたまふわざなれど(定員が決められた式次第だったが)、おぼえことに(特別に図って)、容貌ある限り(随員に至るまで、黒服の礼装は当然として)、下襲の色(したがさねのいろ、垂れ尻の色)、表の袴の紋(うへのはかまのもん、袴の柄)、馬鞍(うまくら)までみな(まで統一されて)調へたり(ととのへたり、揃えられていた)。　*「御禊」については≪斎院の二度目の御禊。祭に先立ち賀茂川で御禊を行い、祭の当日は上賀茂下鴨両社に参拝し、以後紫野の斎院に入る。≫と注釈にある。斎院の一度目の禊ミソギ

は丸二年前の初斎院に入る際の「儀式」だった、のか、何だか良く分からない。　*「上達部など数定まりて」は注釈に≪二度目の御禊は、大納言一名、中納言一名、参議二名の計四名が供奉する（延喜式）。≫とある。

とりわきたる宣旨にて（今上帝の特別な御采配で）、大将の君も仕うまつりたまふ（近衛大将の源氏の君も参列をお勤めなさいます）。

かねてより（其の日は早くから）、物見車心づかひしけり（見物の車の場所取りが大変でした）。一条の大路、所なく（隙間なく）、むくつけきまで騒ぎたり（うんざりするほど混み合っている）。所々の御桟敷（所々に設けられた見物席の）、心々にし尽くしたるしつらひ（趣向を凝らした飾り付けや）、人の袖口さへ（牛車の御簾から覗かせた女房たちの袖口の色合いさえ）、いみじき見物なり（華やかな見所でした）。

大殿には（左大臣家の姫君は）、かやうの御歩きも（こうした外出も）をさをさしたまはぬに（滅多に為されない上に）、御心地さへ悩ましければ（御気分も優れないので）、思しかけざりけるを（其の気は御有りで無かったが）、若き人びと（若女房たちが）、

「いでや（まぁ残念な）。おのがどち（女房同士だけで）ひき忍びて見はべらむこそ（引け目がちに見物しても）、栄（はえ、晴れがましく）なかるべけれ（御座いません）。おほよそびとだに（余所の人でさえ）、今日の物見には（今日のお祭では）、大将殿をこそは（殿を目当てに）、あやしき（賤しい）山賤（やまがつ、田舎者）さへ見たてまつらむとすなれ（までが楽しみにして居ります）。遠き国々より、妻子（めこ）を引き具しつつも参うで来なるを（遠方から妻子を引き連れて上京するほどですのに）。御覧ぜぬは（御覧なさらないのは）、いとあまりもはべるかな（余りにも勿体無いと存知ます）」と言ふを（と言うのを）、大宮聞こしめして（大宮がお聞きに為って）、

「御心地もよろしき（今日は御気分も幾らか）隙なり（ひまなり、持ち直して）。さぶらふ人びとも（仕えの女房たちも）さうざうしげなめり（楽しみにしているようですし）」とて（と仰るので）、にはかに御車めぐらし仰せたまひて（姫君は急に御車を用意させて）、見たまふ（源氏の殿が帝の使者をお勤めなさる御清め式の行列の見物にお出掛けなさいます）。

日たけゆきて（日が高くなってから）、儀式もわざとならぬさまにて（軽いお出掛けの供拵えで）出でたまへり（お出掛けになりましたが）。隙もなう立ちわたりたるに（ひどく混み合う沿道に）、装ほしう（よそほしう、左大臣家一行はさすがに麗々しく）引き続きて（何台もの車を引き続けて）立ちわづらふ（立往生してしまいました）。

よき女房車（身分の高い女用の牛車が）多くて（多かったが）、雑々の人（ざふざふのひと、雑役の従者たち）なき隙を（なきひまを、の少ない辺りを）思ひ定めて（狙い定めて）、皆さし退けさするなかに（其れ等を退かせて左大臣家一行が割り込んで場所取りする中に）、*網代（あんじろ、軽装車）のすこしなれたるが（の真新しくは無いが）、下簾（したすだれ、屋形入口の帳）のさまなど（の柄などが）よしばめるに（上品で）、いたう引き入りて（奥まって座し）、ほのかなる（僅かに見える）袖口（女房たちの袖口や）、裳の裾（ものすそ、腰飾りの端や）、汗衫（かざみ、童女の晴れ着）など、ものの色（色合いが）、いときよらにて（とても美しく）、ことさらにやつれたるけはひ（態と質素にしている様子が）しるく見ゆる車（はっきりと分かる牛車が）、二つあり（二台在りまし

た)。　*「網代」はアジロともいうが注釈に≪大島本は「あんしろ」とある。網代車のこと。檜の薄板や竹を網代に組んで屋形や側面を張り、彩色や文様を施した車。人目をはばかる私的な外出時に多く用いられた。≫とある。

「これは、さらに(他の車と)、さやうに(同じように)さし退けなどすべき(追い立てて良い)御車にもあらず(御車では無い)」と(と其の車の従者は)、口ごはくて(言い張って)、手触れさせず(左大臣家の従者には御車に手を触れさせない)。

いづかたにも(双方共に)、若き者ども(若い衆たちが祝い酒に)酔ひ過ぎ(ゑひすぎ、酔い過ぎて)、立ち騒ぎたるほどのことは(言い争いになって)、え(とても)認め敢へず(したためあへず、収まりが付かない)。おとなおとなしき(年配の)御前の人びとは(馬上の先駆けは)、「かくな(鎮まれ)」など言へど、えとどめあへず(とても制止出来ない)。

*斎宮の御母御息所(さいぐうのおんははみやすんどころ、斎宮の母上たる六条御息所は)、もの思し乱るる(思い切れない女心に)慰めにもやと(源氏の晴れ姿を一目でも見ようと)、忍びて出でたまへるなりけり(お忍びで出掛けて来て居らした)。　*<斎院>の御禊の日の見物の場で、実勢では劣ったらしいが格式ではより高い<斎宮>を持ち出して、其の<母御>にして<前坊の妃>たる高貴な立場という仰々しさは、殊更に大殿の権威に対抗する六条の地位の高さを強調している。しかし、其の高貴な六条が今や源氏の通い妻として、正妻の左大臣家の姫と引くに引けない面子争いに巻き込まれてしまった。六条が源氏の女でなければ、大殿は御息所を前坊の妃として敬うに違いない。六条が源氏の女ゆえに、大殿も引き下がれなかったのだろうか。大宮の不在が悔やまれる。実権は左大臣家にある。六条は惨めだった。源氏の女に成った事が此れほど悔やまれる事があっただろうか。しかも大殿は身重で、従者は権勢を笠に着て掛かった。

つれなしつくれど(大殿の従者は気付かない振りをしていたが)、おのづから見知りぬ(御車が姫の恋敵の六条御息所ということは次第に知れた)。

「さばかりにては(そればかりの少人数で)、さな言はせそ(何たる言い草か)」
「大将殿をぞ(まさか当家の婿殿を)、豪家(がうけ、頼り)には(にしようとは)思ひきこゆらむ(思っているまいな)」など言ふを(などと大殿の従者が言うが)、

その御方の人も混じれば(其の従者の中には源氏の供人も居て)、いとほしと見ながら(御息所には申し訳なく思うものの)、用意せむも(仲立ちをするのには)わづらはしければ(任が重すぎて)、知らず顔をつくる(知らん顔をしていた)。

つひに(とうとう)、御車ども立て続けつれば(左大臣家の御車を並べ立ててしまったので)、人給ひ(ひとだまひ、女房たちの乗る随行車)の奥におしやられて(の奥に御息所の御車は押し遣られて)、物も見えず(物陰に隠れて姿が見えなくなってしまった)。

心やましきをばさるものにて(不愉快なのは当然だが)、かかるやつれを(こうした密かな見物姿を)それと知られぬるが(知られてしまった事が)、いみじうねたきこと(何より口惜しくて)、限りなし(仕方なかった)。

*榻(しぢ、牛車の支え台)などもみな押し折られて、すずろなる(隣の)車の筒に(くるまのどうに、車の腰に)うちかけたれば(轅の軛を引き掛けていたので)、またなう人悪ろく(又と無く見苦しく)、くやしう(忌々しく)、「何に、来つらむ(如何して、こんな見物に出て来てしまったものか)」と思ふにかひなし(と思って遣る瀬無かった)。　*「榻」は≪牛を取りはずした時に牛車(ぎつしや)の轅(ながえ、先棒)の軛(くびき、取手)を載せたり、また乗り降りの踏み台にした台。(大辞林)≫との事。

物も見で帰らむとしたまへど(六条は見物など切り上げて帰ろうとしても)、通り出でむ隙もなきに(車が抜け出る隙間さえないもどかしさの儘に)、

「事なりぬ(始まったぞ)」と言へば(と周りから声が上がると)、さすがに、つらき人の(連れなくて恨めしいはずの源氏の)御前渡りの(晴姿で参列なさる御通りを)待たるるも(心待ちに思うのも)、心弱しや(女心の弱さでしょうか)。

「*笹の隈(ささのくま、目立たない物陰)」にだにあらねばにや(でさえないのかと)、つれなく過ぎたまふにつけても(源氏が自分に気付かずに通り過ぎなさるのを)、なかなか御心づくしなり(尽々無念に御思いに成りました)。　*「笹の隈」については≪『源氏釈』は「笹の隈桧の隈川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」（古今集、大歌所御歌、一〇八〇、ひるめの歌）を指摘。≫と注釈にある。引歌の筋は「檜隈川沿いに馬を止めて水を遣る間に川に映った自分の姿を整える」という事で、解説は「ミロール倶楽部」というサイトの「古今和歌集の部屋」というページにあった。この歌を＜武官が大事に臨んで一呼吸威儀を正す凛々しさが窺える歌＞なのだと、少なくとも御息所はそう解釈して、其の川の影鏡を作る一助たる「笹の隈」にすら成れない身の程を嘆いた、のだろう。切なさも陰に込もって凄まじい。

げに(実に)、常よりも好みととのへたる車どもの(いつになく飾り立てた見物車両の列が)、我も我もと(此れ見よがしに)乗りこぼれたる(打ち出した)下簾の隙間どもも(したすだれのすきまどもも、簾端の袖口の色の華やぎにも)、さらぬ顔なれど(源氏は素知らぬ顔をして通り過ぎ為されたが)、ほほ笑みつつ後目に(しりめに、中には心惹かれて流し目を)とどめたまふもあり(御置き為さる事もありました)。

大殿のは(左大臣家一行の列は)、しるければ(他を圧してはっきり分かったので)、まめだちて渡りたまふ(源氏は真面目ぶって其の前をお通り為さる)。

御供の人びとうちかしこまり(源氏の従者たちが左大臣家一行の列に緊張して)、心ばへありつつ渡るを(敬意を表しながら通っていったが)、おし消たれたるありさま(御息所一行は全く無視されてしまったので)、こよなう思さる(惨めで情けなかった)。

「影をのみ御手洗川のつれなきに、身の憂きほどぞいとど知らるる」(和歌 9-1)

「陰にすら成れぬ隔ての日隈川、姉の子なれば憎さ百倍」(意訳 9-1)

*「御手洗川(みたらしがわ)」は＜北区上賀茂を流れる賀茂川(鴨川)の分水＞である現在の明神川(みょうじんがわ)とされる。「京都市観光文化情報システム」という Web サイトにある写真の風情はそのまま当時の情景と考えても楽しいほど味わい深い。また「笹の隈」で引かれた檜隈川を明日香村の川の固有名詞と考えずに、一般の木陰の川面と

思えば此処も＜ひのくまがは＞ではある。だから六条の女は、殿の晴姿を照り映す「御手洗川の」「陰をのみ(陰にすら)」「つれなきに(成れない)」「影をのみ(遠くから其れらしい姿だけを)」「見たらし(見るしかなかった)」「側の(奥隅にいた自分の)」「つれなきに(情けなさに)」、図らずも然うさせられた其の川面に「身の浮きほど」軽々しい扱いを大殿に受けた「身の憂きほどぞ」「いとど」思ひ「知らるる」という、凄まじい恨み節。

と(と御息所は)、涙のこぼるるを、人の見るもはしたなけれど(女房に見られるのも決まりが悪かったが)、目もあやなる御さま(見目麗しい源氏の大将振りに)、容貌の(晴姿の)、「いとどしう(大変見事な)出でばえを(出来栄えを)見ざらましかば(見なければ、心残りだっただろうからやはり見れて良かった)」と思さる(とも御思いだった)。

ほどほどにつけて(分相応に)、装束(衣裳や)、人のありさま(供拵えを)、いみじくととのへたりと見ゆるなかにも(気張って揃えたと見える行列の中でも)、上達部はいとことなるを(高官たちはやはり別格だったが)、一所の御光には(ひとところのおんひかりには、源氏の晴れやかさの前では)おし消たれためり(影を潜めたようだった)。

大将の御仮の随身に(だいしゃうのおんかりのずいじんに、近衛大将の臨時の護衛に)、*殿上の将監(てんじょうのじゃう、近衛大夫)などのすることは(などが勤める事は)常のことにもあらず(滅多に無く)、めづらしき行幸などの折のわざなるを(特別の帝の御出掛けの際などの差配だが)、今日は右近の蔵人の将監(うこんのくらうどのじゃう)仕うまつれり(仕え申した)。 *「将監(じゃう、しゃうげん)」は近衛府のカミ(大将)スケ(中将・少将)に次ぐ三等官で普通なら殿上の身分ではないが、帝側近の近衛なので宮筋の蔵人などは殿上を許されて大夫(たいふ)と呼称されたらしい(Web サイト「官制大観」他)。

さらぬ御随身どもも(其の他の護衛士たちも)、容貌(顔立ちや)、姿(背格好を)、まばゆくととのへて(美しく揃えてあって)、世にもてかしづかれたまへるさま(源氏の厚遇されている様子は)、木草もなびかぬはあるまじげなり(草木も靡かぬものは無いほどでした)。

*壷装束などいふ姿にて、女房の卑しからぬや(女房でも身分の有る者や)、また尼などの世を背きけるなども(また尼などの俗世を離れた者なども)、倒れまどひつつ(群衆に紛れて揉みくちゃになりながら)、物見に出でたるも(見物に出て来ているのも)、 *「壷装束(つぼさうぞく)」は≪平安時代から鎌倉時代にかけて、上・中流の女子が徒歩で外出または旅行する際の服装。小袖・単(ひとえ)・袿(うちき)などを着重ね、歩行しやすいように裾(すそ)を引き上げて身丈(みたけ)に合わせ、ふところを腰帯で結んで、余りを腰に折り下げたもの。市女笠(いちめがさ)をかぶることもある。腰の部分が広く、裾がつぼんでいる形からいう。つぼしょうぞく。≫と大辞泉にある。

例は(普段なら)、「あながちなりや(見境も無く)、あなにく(浅ましくて見っとも無い)」と見ゆるに(と見える所だが)、今日はことわりに(今日は禊ぎの神事を題目に断って)、*口うちすげみて(市女笠を被って)、髪着込めたる(かみきこめたる、髪を上着の中に入れた)あやしの者どもの、手をつくりて(手を合わせて)、額にあてつつ(額に拝んで)見たてまつりあげたるも(源氏の行列姿を仰ぎ見致すのも)をこがましげなる(面白い姿でした)。 *此処は壷装束の具体的描写。「市女笠」は≪かぶり笠の一。菅(すげ)などで編み、中央に高く巾子形(こじがた)という突起を作った笠。市女が使用したのでこの名を生じたが、平安中期ごろには上流の女性の外出用となり、男子も雨天のときなどに用いた。(大辞泉)

≫とあり、要するに笠の頭の天辺が壷装束の「口うち窄みて」いた。また、「髪着込めたる」については≪うしろに垂れた髪を小袖の中に入れ、上衣の両褄を折って腰帯に挟み（小学館古語辞典）≫と、「壷装束」の図入りの説明に有る。

＊（をこがましげなる、それを痴がましい顔になっている）賤の男（しづのを、下男）まで、おのが顔のならむさまをば知らで（自分の顔がだらしなく成っているのも気付かず）笑みさかえたり（相好を崩して見物していました）。　＊注にも在るがこの「をこがましげなる」は上文の述語形容詞であると同時に当文の名詞形容であり下述の「顔のならむさま」の修飾形容であって、此処では敢えて二度書きで明示したが、本来は一句の続き文で「見奉り上げたるも痴がましげなる賤の男まで」という洒落言葉になっている。あたかも筆の運ぶままに興じたとも、あざとくも見物の賑わいを演出したとも、取れる語り口。

何とも見入れたまふまじき（源氏が気に留める事も無さそうな）、えせ受領の娘などさへ（一地方官の娘などでさえ）、心の限り尽くしたる車どもに乗り（精一杯飾り立てた車に乗って）、さまことさらび（殊更びた様子で）心げさうしたるなむ（気を引こうとしているのも）、をかしきやうやうの見物なりける（其々楽しい見所でした）。

まして、ここかしこにうち忍びて通ひたまふ所々は（源氏が忍び通う先の女たちは）、人知れずのみ（引け目ばかりを感じて）数ならぬ嘆きまさるも（自信を無くしがちに成ってしまう者が）、多かり（多く居ました）。

式部卿の宮、桟敷にてぞ見たまひける（桟敷で見物なさっていて）。「いと（まことに）まばゆきまで（眩しいほど美しく）ねびゆく人の容貌かな（円熟して行く源氏の姿というものだ）。神などは（神までが）目もこそとめたまへ（目を掛けてしまい為されそうな）」と、ゆゆしく思したり（と不吉にさえ御思いに為った）。

姫君は（桟敷で同席なさっていた式部卿宮の娘なる朝顔の姫君は）、年ごろ（数年来）聞こえわたりたまふ（源氏が手紙をお寄せして）御心ばへの（気遣いも）世の人に似ぬを（通り一遍ではなかったので）、

「なのめならむにて（普通の御器量でも）だにあり（これほど熱心なお手紙で誘われたら絆されますのに）。まして、かうしも、いかで（ましてこのような見事な御器量でいらっしゃれば、どうして心動かさずに居られましょうか）」と御心とまりけり（と感激なさった）。いとど（ただ、それだけに遠い存在に思えて、更に進んで）近くて見えむまでは思しよらず（親しく付き合おうとまでは御思いに為らなかった）。若き人びとは、聞きにくきまでめできこえあへり（しかし姫の若女房たちは聞き苦しいほどの情欲妄想で源氏を褒め称え合っていたのでした）。

祭の日は（そして四月になった中の酉の日に執り行われた賀茂祭当日は）、大殿にはもの見たまはず（左大臣家一行は見物にお出掛け為さる事はなかった）。

大将の君、かの御車の所争ひを（ところあらそひを、場所取り騒ぎを）、まねび（再現して真似るように詳しく）聞こゆる人ありければ（お知らせする者が居たので）、「いといとほしう憂し（実に不本意で情けない）」と思して（と源氏は御思いに為って）、

「なほ(やはり)、あたら重りかに(格式張って)おはする人の(いる姫は)、ものに情けおくれ(思い遣りに欠け)、すくすくしきところ(杓子定規な所に)つきたまへるあまりに(囚われる余りに)、みづからはさしも思さざりけめども(自分では其れ程の心算では無くても)、*かかる仲らひは(こうした妻妾の関係は)情け交はすべきものとも(思い遣るものとも)思いたらぬ(考え至らぬ)御おきてに従ひて(姫の思いに従って供人どもが)、次々(下から下へと)よからぬ人のせさせたる(無礼な振舞いをけし掛けた)ならむかし(という事なのだろう)。 *「かかる仲らひ」は一夫多妻の風習にあっては当然に心得てあるべき妻妾の間柄。

御息所は、心ばせのいと恥づかしく(御性格がとても慎ましく)、よしありておはするものを(上品でいらっしゃるので)、いかに思し憂じ(うむじ)にけむ(どんなに嫌な思いを為さった事だろうか)」と、いとほしくて(申し訳なくて)、参うでたまへりけれど(源氏は謝罪をしようと六条の御息所の許に出向かれたが、御息所は)、

斎宮のまだ*本の宮におはしませば(斎宮がまだ当所にいらして)、榊の憚り(さかきのはばかり、神事への差障りが有る事)にことつけて(を口実にして)、心やすくも(気を許すような)対面したまはず(面会には応じなさらない)。 *注釈に≪斎宮に卜定(ぼくじょう)されたが、まだ初斎院に入らず、本邸(六条の自邸)にいらっしゃるという意。≫とある。しかし、斎宮にとって卜定による聖地での潔斎生活は必須の筈で、その間を自邸で過ごすのは考え難い。と思ったら、この時点で斎宮がまだ自邸に居たという記述が再度後にもあって、逆にそんな事も在ったのかと、此の文の方が当時の記述だけに改めて驚かされる。六条邸は宮家だったので「本の宮(もとのみや)」と言うことか。

ことわりとは思しながら(源氏は止むを得ないとは御思いに為ったが)、「なぞや(どうして)、かくかたみに(こう御互いに)そばそばしからで(とげとげしくして)おはせかし(御出でなのだろう)」と、うちつぶやかれたまふ(つい呟き為さいます)。

[第三段　賀茂祭の当日、紫の君と見物]

今日は(其の日は源氏は左大臣家に足が向かず)、二条院に離れおはして(二条の院に戻って左大臣家から距離を置いて居らして)、祭見に出でたまふ(連日の賀茂祭の見物にお出掛けする事に為された)。西の対に渡りたまひて(そこで光君は紫の君が御出でになる西の対に立ち寄られて)、惟光に車のこと仰せたり(惟光に車の用意を御命じに為りました)。

「女房出で立つや(女房連は祭り見物に出掛けるのかな)」とのたまひて(と仰って)、姫君のいとうつくしげに繕ひ立てて御座するを(つくろひたてておはするを、着付けていらしたのを)、うち笑みて見たてまつりたまふ(微笑みながら御覧なさいます)。

「君は、いざたまへ(君は来るんだよ)。もろともに見むよ(一緒に見ようね)」とて、御髪の(おぐし、姫君の髪が)常よりもきよらに見ゆるを(いつに増して綺麗に見えたので)、かきなでたまひて(源氏は姫の頭を撫でながら)、

「久しう削ぎたまはざめるを(久しく切っていない様だが)、今日は、*吉き日(よきひ、髪削ぎをして良い日)ならむかし(ではなかっただろうか)」とて、暦の博士(こよみのはかせ、陰陽師)

召して(を呼んで)、時(とき、髪削ぎをして良い時間)問はせ(とはせ、調べさせ)などしたまふほどに(たりなさりながら)、　*賀茂祭は四月の第二の酉の日で、この日はちょうど「髪削ぎの吉日」に当たったらしい。「源氏の部屋」という Web サイトの「風俗博物館レポート」のページに≪『拾芥抄』(洞院公賢撰・14 世紀初頭成立と推定される百科全書)「諸事吉凶日部」の中には「髪曾木日事」という項目もあり、「凡酉丑日為吉」(凡そ酉丑の日を吉と為す)とされています。≫とあった。

「まづ(先に他の子たちを)、女房出でね(女房が遣って上げなさい)」とて、童の姿どもの(姫君の遊び相手の子供たちが)をかしげなるを御覧ず(女房に髪削がれる変わり映えを源氏は御覧になりました)。いとらうたげなる髪どものすそ(とても可愛らしい髪の先が)、はなやかに削ぎわたして(きれいに削ぎ揃えられて)、浮紋の表の袴(うきもんのうへのはかま)にかかれるほど、けざやかに見ゆ(晴れやかに見えました)。

「君の御髪は(きみのみぐしは)、我削がむ(私が削いであげよう)」とて、「うたて(いや此れは)、所狭うもあるかな(随分多いね)。いかに生ひやらむとすらむ(何処からこんなに育って来るのだろう)」　と、削ぎわづらひたまふ(削ぐのに苦労なさる)。

「いと長き人も(相当長い髪の人も)、額髪はすこし短うぞあめるを(前髪は短めだろうが)、むげに後れたる筋のなきや(後れ毛が無くては)、あまり情けなからむ(見っとも無い)」

とて、削ぎ果てて(削ぎ終えて)、「千尋(ちひろ、いく久しゅう)」と祝ひきこえたまふを(と祝い言葉をお掛けなさるのを)、少納言、「あはれにかたじけなし(有難い御心遣い)」と見たてまつる(と感じ入る)。

「はかりなき千尋の底の海松房の、生ひゆくすゑは我のみぞ見む」(和歌 9-2)

「海より深い愛情で、貴方の幸を祈ります」(意訳 9-2)

*「海松房(みるぶさ)」は枝が房になっているミルメ(海松布、海草)の事と古語辞典にあるが、是に若草の姫君の緑の黒髪を準えるのは分かり易い。また古語辞典には「海松房」は「昔の髪削ぎのときに用いた」ともあって、この場面に当語を持ち出す趣に深みを与えている。ように思いたいが、散髪に海草を如何用いたのかが判然としない。髪を切る時に、毛先を纏める為に湿らせたのかもしれないし、栄養分は有りそうなのでリンス剤にしたのかもしれない。しかし良く濯がなければ後が面倒にも思えるし、濯ぐ事自体が面倒にも思えて、良く分からない。B面では「海底深く潜む若草の美しさを私だけは知っている」という屈折した事情を言っているようにも見えるが。

と聞こえたまへば(と光君が贈歌為さると)、

「千尋ともいかでか知らむ定めなく、満ち干る潮ののどけからぬに」(和歌 9-3)

「深さがあまり分かりません、潮の満ち干が激しくて」(意訳 9-3)

*「千尋」をそのまま切り返して、「満ち干る潮」に不在がちな源氏の浮気を恨んだ、と「注」にもある。

と、ものに書きつけておはするさま(ちょっと書き付けた姫の姿は)、らうらうじきものから(いじらしくも見えたが)、若うをかしきを(文句が大分大人びてきて)、めでたしと思す(源氏は姫の成長振りを喜びなさる)。

今日も(今日も通りは)、所もなく立ちにけり(祭の見物客の車で埋め尽くされていた)。*馬場の御殿(うまばのおとど)のほどに(沿いに)立てわづらひて(車を止めようと為されたが)、　*「馬場の御殿」は一般には馬事会場に設けた観閲舎で宮城内外に数箇所在ったらしいが、此処では≪左近の馬場。一条西洞院にある。≫と注釈に在るので、一条通りで右往左往していたのだろうか。

「上達部の車ども多くて、もの騒がしげなるわたりかな(どうも騒がしげな所だな)」と(と源氏が)、やすらひたまふに(徐行なされていると)、よろしき女車の(小奇麗な女車から)、いたう乗りこぼれたるより(袖口を大袈裟に帳の下から覗かせて)、扇をさし出でて(扇の先で)、人を招き寄せて(手招きしながら)、

「ここにやは(どうぞ此処に)立たせたまはぬ(御留め為さいませ)。所避り(ところさり、少し御詰め)きこえむ(致しましょう)」と聞こえたり(と声が掛かりました)。

「いかなる好き者ならむ(随分場馴れして気が利く)」と思されて(と源氏は女だてらに社交性が在ると御思いに為って)、所もげによきわたりなれば(場所柄も良い辺りだったので)、引き寄せさせたまひて(その隣に車を御留めになって)、

「いかで得たまへる所ぞと(随分良い場所をお取りで)、ねたさになむ(羨ましいです)」とのたまへば(と仰ると)、よしある扇のつまを折りて(風流な扇の一枚を摘まみで折り取って)、

「はかなしや人のかざせる葵ゆゑ、神の許しの今日を待ちける　(和歌 9-4)

「日陰の身なので遠慮して、せめて祭に会えるかと　(意訳 9-4)

*是は葵祭当日ならではの凝った言い回しだが、其の言い回しの妙こそが趣向で、歌意自体は気を引くだけの戯れ歌かと思う。「注」にもあるが「あふひ」を「逢ふ日」と「葵」に重ね読めば、「はかなしや(遊び相手という頼りない立場で)」「人の翳せる(他人が翳し見る＝人の目を引く)」「逢ふ日ゆえ(逢瀬なので)」「人の髪挿せる葵由縁(皆が葵の飾りを頭に挿して厄除けする由緒のある)」「神の許しの(神に逢瀬の許しを奉る処の)」「今日を待ちける(賀茂祭当日の今の日を待っていました)」、となる。要するに筋は＜祭見物の賑わいの中でお会い出来るかも知れないと思って出て来ました＞という他愛なさ。ところで、「注」には≪「人のかざせる」とは、既に人の物となってしまっているの意で、他の女と同車していることをいう。≫とあるが、左様に「ひとのかざせる」を＜翳すー頂くー捧げるー戴せる＞と連ねて、「葵祭見物の車に人を同乗している」と読むには、「葵」に＜乗車＞を意味する引歌が求められる、気がする。

*注連の内には(しめのうちには、入れませんので)」とある手を思し出づれば(と書いてある筆跡から源氏は相手をお知り為ったが)、かの典侍なりけり(其れは何と彼の老女の典侍であった)。
*「注連」は標縄(しめなは、注連縄)の事で、元々は縄張りの境界線だったが次第に様式化されて神聖な場所への禁区張りとなったらしい。

「あさましう(凝りもせず)、旧り難くも(ふりがたくも、年甲斐も無しに)今めくかな(若ぶって)」と、憎さに(源氏は煩がって)、はしたなう(無愛想に)、

「かざしける心ぞあだにおもほゆる、八十氏人になべて逢ふ日を」(和歌 9－5)

「接待上手に気も引ける、八方美人に隙は無いかと」(意訳 9－5)

*典侍からの贈歌の「翳す」を＜敬う＞という意味で切り返した源氏の返歌。典侍が葵祭に因んだ歌詠みだったので、源氏も「八十氏人(やそうぢびと)」を持ち出した。「氏人＝氏子(うぢこ)」は≪産土神(うぶすながみ、生まれた土地の神)の鎮守する土地に住んでいて、その守護を受け、それを祭る人々。(大辞泉)≫なので、農耕社会に於ける諸地域での主たる構成員である。それが賀茂祭に在っては国の祭なので、「八十氏人」なる多くの氏族の者が氏子になるという壮大さ。ただし、此方も歌意は嫌味のひとくさりなのだろう。「翳しける心ぞ(お持て成しの気配りが)」「徒に思ほゆる(却って厄介に思えます)」「八十氏人に(どんな客とも)」「並べて葵を(枕を並べて許し合うのでしょうから)」と些か不謹慎、というか人と神との目交わいを実感を持って呪術したシャーマニズムの世界観、で暮らしていた当時の生活が偲ばれる所なのかも知れない。実際、この話でも物の怪は頻出する。

女は、「つらし(当て付けがましい)」と思ひきこえけり(と思ったのでしょう)。

「悔しくもかざしけるかな名のみして、人だのめなる草葉ばかりを」(和歌 9-6)

「葵(あふひ)を逢ふ日と紛らわす、思わせ振り名の恨めしさ」(意訳 9-6)

と聞こゆ(と申し上げました)。

人と相ひ乗りて(女を同伴しているので)、簾をだに上げたまはぬを(源氏が簾さえ巻き上げ為されないのを)、心やましう思ふ人多かり(残念に思う女たちは沢山いました)。

「一日の(ひとひの、先日の)御ありさまのうるはしかりしに(御禊の日の勅使を勤めた源氏の晴姿に引き換え)、今日うち乱れて歩きたまふかし(今日は随分寛いだ姿でお出掛けなさっているようだ)。誰ならむ(誰だろう)。乗り並ぶ人(一緒に乗っている人は)、けしうはあらじはや(其れ相応の人なのだろう)」と、推し量りきこゆ(推し量る声が上がっていました)。

「挑ましからぬ(しなくても良い)、かざし争ひかな(髪挿しと翳しの言い争いだったな)」と、さうざうしく思せど(源氏は興醒めにお思いだったが)、かやうに(この典侍ほどに)いと面なからぬ(ひどく厚かましくは無い)人はた(人であれば)、人相ひ乗りたまへるに(女と同乗なさって居る事に)慎まれて(つつまれて、遠慮して)、はかなき御いらへも(他愛無いお返事を)、心やすく聞こえむも(気安く申し上げる事さえ)、まばゆしかし(気が引けますものを)。